

「速さと静けさのあいだで」

東京に来て数か月。だが、自分はほとんど変わっていない——そんな感覚が消えずにいる。
春から研修生として文部科学省へ派遣されることになり、三十年近くを過ごした地元を離れた。知らない街、知らない部屋、知らない生活。環境が変われば、人もまた自然に変わるものだと、漠然と思っていた。

だが、現実は違った。

私はただ、速さの中に放り込まれただけだった。

朝の電車は途切れることなくやってきて、ホームには人があふれる。目も合わせず、体を押し合い、誰もがわずかな隙間を奪い合う。改札を抜けても人の流れは止まらず、後ろから押されるまま、自分がどこへ向かっているのか分からなくなる瞬間さえある。

仕事もまた似ている。次々と目の前に現れる業務に向き合ううちに一日が終わり、あっという間に一週間が過ぎていく。

その一方で、生活は驚くほど静かになった。

初めての一人暮らし。食事は味わうものから「済ませるもの」に変わった。休日の夜、まだ一言も声を発していないことに気づき、はっとすることがある。

これまで当たり前にあった会話や何気ないやりとりが、日々を区切り、日常を支えてくれていたのだと、離れて初めて気づかされた。

外では時間が慌ただしく流れ続ける。

しかし部屋に戻ると、すべての音がふっと消える。自分の生活だけが取り残されたかのように、静かになる。

数か月前と比べれば、生活は大きく変わった。だが、自分自身は地元にいた頃と変わっていない。

それでも、この場所で向き合う仕事の先には、必ず子供たちの姿があると強く感じる。それこそが教育行政の肝であり、その気持ちを大切にしながら働く文部科学省の人たちに触れるたび、自分は何を見るべきなのかと考えさせられる。

変化は環境が与えてくれるものではないのかもしれない。このままでは速さにも、静けさにも、やがて慣れていくだけだろう。

だからこそ、この場所で何を見て、何に気づくのか。その問いから目を逸らさず、自分の感覚を磨き続けたい。

時間は瞬く間に流れていく。

限られた研修の日々で積み重ねた経験の一つ一つを、これからの自分を形づくる糧としてつなげていきたい。

(H・Y)

